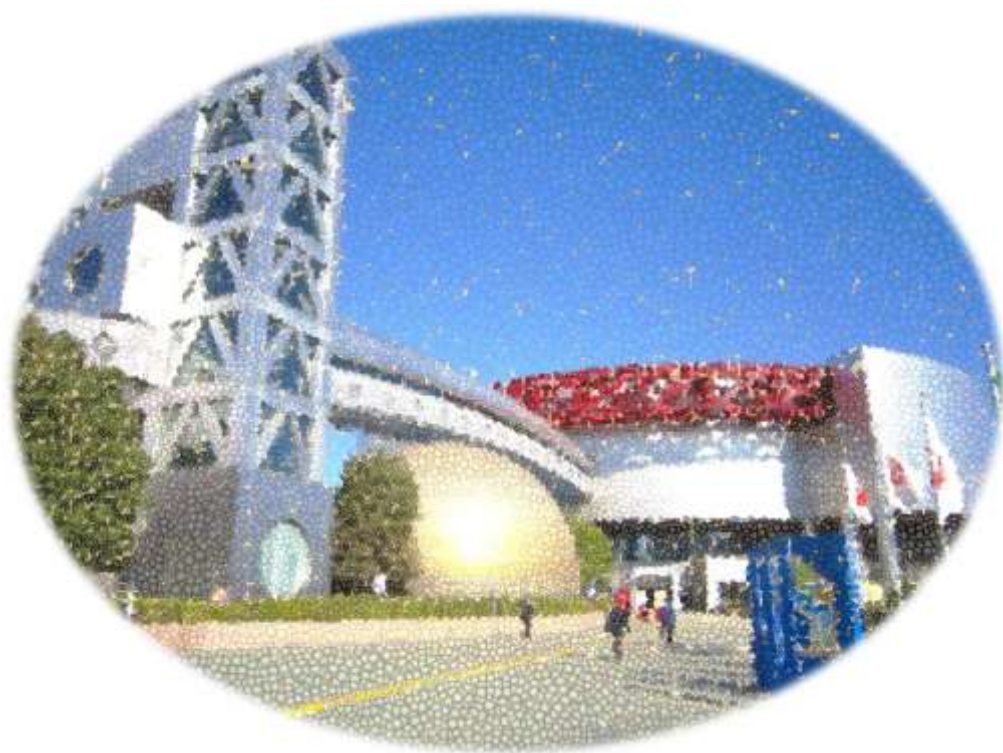


令和2年度

英語教育アドヴァンスト研修

授業改善プロジェクト 報告書

—アクション・リサーチによる高等学校英語授業での実践研究—



神奈川県立国際言語文化アカデミア

はじめに

神奈川県立国際言語文化アカデミア 所長
小島 誉寿

昨年は、新型コロナウイルスの感染拡大による影響から、授業はもとより、文化・スポーツなどの学校行事も中止を余儀なくされるなど、多くの方々が大変な日々を過されていることと思います。ことに、限られた年限のなかで、希望を胸に学業と文化・スポーツ面での修養に励み、人として大きく成長する得難い貴重な時期にある学生の方々のことを思うと、特別な1年として片づけることのできない、まさに痛恨の極みであります。

しかし、コロナ禍にあっても、新しい生活様式を模索するなかで、オンラインによる授業を行うなど、先生方の創意・工夫による新たな取組も進められていると承知しております。これまでも、教育現場では、知識の理解の質を高め資質・能力を育む「主体的・対話的で深い学び」として、「何ができるようになるか」が重要なポイントとされ、「言語能力の確実な育成」や「理数教育の充実」では、単に知識を覚えるだけでなく、「具体と抽象を押さえて考えるなど情報を正確に理解し適切に表現すること」や、「授業内容を維持した上で、日常生活から問題を見出す活動や見通しをもった観察・実験」などの学習の充実と質の向上が求められています。一方、環境面では、ICTの活用が叫ばれているものの、その整備状況は、無線LANをはじめとするハードなどの「もの」や、使いこなす「ひと」の存在など、共に遅れている状況にあります。

こうしたコロナ禍でのピンチをチャンスとして捉え、ICTの活用をはじめとする教育の手法について変革が進むことは、国際社会の一員である我が国においてもグローバルな人材育成にとり有益であると大いに期待するものであります。

国際言語文化アカデミアでは、「国際社会で活躍できる人材の育成」を使命の一つに掲げ、県教育委員会と連携して「外国語にかかる教員研修事業」を進めていますが、その事業の柱として、平成23年度から、県立高校における英語教育で中核的な役割を担う英語教員の人材育成を計画的に行う「英語教育アドヴァンスト研修」を実施しています。

この研修の中核をなしているのが授業改善プロジェクトであり、そこでは、教員一人ひとりが自分や生徒たちと向き合い、授業改善に向けた課題の解決に取り組みます。また、当所のコーチングスタッフが集合研修・授業訪問などを実施し、英語教育に関する理論・実践の両面から継続的な指導・助言を行い、それを基に、教員自身が研修の主体となって積極的にチャレンジしていくことが求められます。今後も、生徒との信頼関係を深めながら協力して授業改善を図るこうした取組が、実際の教育現場に広まっていくことを期待しています。

最後に、当所での研修は、最終年度となり、この研修事業も総合教育センターに移管されますが、教員の皆さまも、未来を拓く生徒たちの人間形成に携わる重みを胸に刻み、更なる精進をお願いします。

目 次

「英語教育アドヴァンスト研修」とは	1
「教師が変わり，生徒が変わる授業」を目指して－授業改善プロジェクト	3

「話すこと」にかかわる指導

論理性を高めるためのスピーキング指導	田子 季美江	5
日常的な事柄を説明する力を育てるスピーキング指導	栗原 健人	9
聞き手の理解を意識しながら会話を継続させるスピーキング指導	安藤 雄希	13
効果的な支援を工夫したスピーキング指導	齋藤 裕志	17

「読むこと」にかかわる指導

主体的な読解を促すリーディング指導	実村 泉	21
能動的な読みと的確な内容理解を促すリーディング指導	潮来 友梨	25
パッセージの概要・パラグラフの要点を意識させる読解指導	宮原 万祐子	29
自立した読み手を育てるリーディング指導	磯部 詩織	33

「書くこと」にかかわる指導

論理的で一貫性のある文を書く力を育てる指導	小本 崇広	37
-----------------------	-------	----

*それぞれの実践レポートの内容については，言語活動の呼称などに関し，厳密な用語の統一はしていません。

英語教育アドヴァンスト研修とは

○ 英語教育アドヴァンスト研修のねらい

英語教育アドヴァンスト研修は、神奈川県で中核的役割を担う高等学校英語科の先生方に専門性の高い研修の機会を提供することを目指し、県教育委員会との連携のもと、国際言語文化アカデミアで平成23年度から開講されました。

集合研修9日（前期2日，夏季4日，後期3日），勤務校での授業研究1日（前期・後期各半日，研修スタッフ訪問）から構成される合計10日間のプログラム（※）は、「英語教師の専門知識，英語による発信力」「授業研究，授業改善」「多文化共生，異文化コミュニケーション」を3つの大きな柱としています。（※）最終年度（令和2年度）は夏季3日の合計9日間のプログラムとして実施しました。

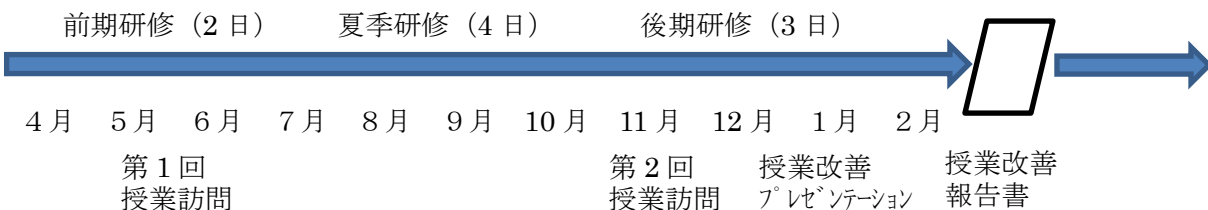
Objective 1	Objective 2	Objective 3
<u>Expertise in English</u>	<u>Reflective Teaching</u>	<u>Multicultural Awareness</u>
英語による発信力，および英語教育・言語習得理論の実践への活用力を磨く。	自らの授業を客観的に分析し，他教員の実践からも学びながら改善へと結びつける省察力を磨く。	英語教育において多文化共生，異文化コミュニケーションを扱うことの意義について意識を高める。

令和2年度までの10年間で，計166名の参加者が，高度な言語知識・技能およびそれらを基盤とした指導力を身につけ，仲間の教員との共同による英語教育推進に貢献すべく，県内の各学校で活躍しています。

毎年プログラム内容に修正を加えながら，英語運用能力向上の試みをはじめ，省察による授業実践力向上，多文化共生・異文化コミュニケーションへの意識高揚など，研修内容の改善と充実に取り組んできました。

○ 研修成果を活かす場としての授業改善プロジェクト

研修内容は教室でのよりよい授業実践，生徒の英語力向上へと結びつかなければなりません。しかし，教師であれば授業改善の複雑さ・難しさは身をもって経験しています。そこでアドヴァンスト研修では，集合研修において多文化共生への意識，英語力，英語教育に関する専門知識を高めながら，勤務校では継続的に授業改善に取り組むことができるように授業改善プロジェクトを取り入れています。



（※）令和2年度は受講人数を絞ることで夏季研修の日程を減じて集中的な研修を行いました。また、コロナ禍の影響により第1回授業訪問は中止とし、オンラインでの個別授業改善相談となりました。

○ 10年間の歩み

アカデミアにおけるアドヴァンスト研修は10年の節目を迎え、今年度が最終年度となりました。過去この1/2頁分のコメント欄には、各年度の研修受講者の方々の報告書を読んだ後の気づきを記してきました。科学技術の進展は、コンピュータにしても自動車にしても、10年経てば目を見張るような変化ですが、それに比べると、教室での教育実践の歩みは、毎年同じような課題を抱え、悩み、解決するといった地味な営みです。また生徒の成長は数値では測れない側面が多く、教師の仕事の成果が理解されにくい原因になっています。しかし考えてみると、人間が皆生まれたときはゼロからスタートするのと同じように、教師と生徒の出会いもゼロからスタートするわけで、だからこそお互いに少しずつ知り合い、時間をかけて信頼関係を築きながら、学び合う機会が与えられるわけです。結果も大事ですが、学びの過程で教師や生徒が得るさまざまな知恵こそが、その後、生きていくうえで最も大切なことなのではないでしょうか。昔の教師としての自分を思い浮かべると、目を覆いたくなるような失敗の連続でしたが、その経験は、少しだけ成長した今の自分の存在にとり不可欠の要素です。

アカデミアでのアドヴァンスト研修は終わりますが、幸い、来年度以降も、総合教育センターにおいてこの研修のコンセプトを受け継いだ新たな研修が始まります。教育実践は何も工夫がなければ堂々巡りになりますが、今後この新しい研修で、アクション・リサーチをはじめとする省察的実践の手法を学び、一日一日を大切にして、科学的分析の利点を取り入れつつも人間味溢れる実践ができる先生たちがさらに増えることを期待しています。

○ 報告書作成の目的

本報告書の目的は3つあります。第一に、研修参加者が自らの授業改善の軌跡を記述しお互いの情報を共有することで今後の授業改善のための共同体づくりに役立てること。第二に、報告書の内容を他の英語科教員と共有することで、授業改善に関するアイデア創出に資すること。第三に、高等学校英語教育の課題やそれに対する現場の取組状況を公表することで、英語教育や教師教育にかかわる研究者の今後の研究に資することです。

お読みになる際は、以下の本報告書作成・編集方針をご理解いただけるようお願いいたします。

授業改善プロジェクト報告書作成・編集方針

1. 授業に参加している生徒の個性や尊厳を尊重し、生徒はみなそれぞれの可能性を持っているとの認識に立つ。
2. 学校や生徒の状況について、読者に参考となる情報を個人情報保護に留意して記述する。
3. 実践報告については、理想論にとらわれず、現状認識に根ざした課題解決の軌跡を記述する。
4. 授業改善のプロセスやストーリーが読者にわかるように記述する。
5. データ処理や分析については、統計処理を含め言語教育研究で用いられる手法を積極的に取り入れ、授業改善の手だての効果を記述する。

本研修の実施および本報告書の作成にあたっては、過去の文献や研究成果、私たち研修担当者自身がお世話になった諸先生方から多くの知見をいただいていることを申し添えます。

「教師が変わり、生徒が変わる授業」を目指して一授業改善プロジェクト

○ 授業改善プロジェクトの流れ

授業改善プロジェクトは次のような手順で進められます。

1. 自分の授業スタイルの振り返り

授業で行っている個々の活動の目的と効果、活動のつながりをあらためて考えることで、英語教師としての思いと実際の指導方法の整合性を確認します。これにより、自分の授業を客観的に分析するということを体験します。

2. 授業における課題の発見

現在担当している科目の1つについて、どのような課題・問題があるか、教師の思いと授業の実情にどのような食い違いがあるかなどを、思いつく限り挙げてみます。

(例) 英文読解に多くの時間を費やしてしまい、生徒に自己表現をあまりさせていない。

教科書英文の読解活動には取り組むが、初見の英文に対応できる読解力が育っていない。

3. 改善すべき課題の確定

上で挙げた課題のうち、改善可能で優先順位の高いものを1つまたは2つ選びます。

4. 生徒の現状把握

確定した課題に関連する生徒の学習態度や英語力・技能などを、質的・数量的に調査します。

(質的データの例) 生徒の英語学習に関するコメント、教師による学習観察記録

(数量的データの例) 標準テストの得点、推定語彙サイズ、発話語数

5. 改善目標の設定

授業改善の目的とゴールを、「リサーチ・クエスチョン」および「改善の目安(数値目標)」として明確に言語化します。

6. 目標達成のための手だての決定

目標を達成するために、授業でどのような指導を行うかを決めます。その際、それぞれの指導事項や言語活動にどのような目的や効果があるのかを明らかにしておきます。

(例) プレリーディング活動を工夫すれば、興味や背景知識が活性化され、主体的に読解に取り組むようになるだろう。

7. 生徒の変化の検証と教師自身の振り返り

原則的に事前の現状把握で用いたものと同じ手法で、生徒の変化・向上を検証し、改善目標が達成されたかどうかを調べます。また同時に、この一連の取組を通して「生徒の見方」「授業のデザイン」「教材の扱い方」などについて、教師自身がどのように変化したかを省察します。

8. 報告

同様の課題を抱える教師仲間との情報交換、勤務校や地区での情報提供に役立てるために、レポートを作成します。ここで再度、今回の授業改善の内容・手法を振り返るとともに、今後の課題について考察します(研修最終日に英語による口頭発表も行います)。

○ “Teacher as a Researcher” の意識とスキル

「自分が教わったように教える」「目の前の教材をあるがままにこなす」「はやりの言語活動を切り貼りする」というやり方では、うまくいかないことがよくあります。教師の直観や伝統的なやり方にもよさがありますが、生徒の質的・数量的ニーズを調べ、その客観的データに基づいて、生徒とゴールを共有しながら（変化をとまらぬ）意思決定をしていくという意識やスキルは、プロである教師の成長に不可欠であると考えます。この授業改善プロジェクトに取り組んだ先生方が、仲間を増やしながら、よりよい授業を追求するプロ集団をつくり上げていくことを期待しています。

○ これまでの9年間のテーマ分類

この10年間で受講者の先生方が取り組んできた授業改善のテーマを分類すると、次の表のようになります。平成26年度までは、「動機づけ・学習意欲」やスキルを支える言語知識である「語彙・文法」もテーマとして挙がっていますが、平成27年度からは、『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標に基づいたスキルの習得を目指す授業実践の必要性を重視し、4技能のいずれかをテーマ（＝授業のゴール）として選択することとしています。

	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2
聞くこと	0	1	0	0	1	1	2	2	2	0
話すこと	2	1	2	7	9	4	7	3	7	4
読むこと	5	4	4	6	11	8	6	6	4	4
書くこと	4	4	3	3	4	2	0	4	2	1
動機づけ・学習意欲	6	3	1	5	—	—	—	—	—	—
語彙・文法	3	1	2	3	—	—	—	—	—	—
計	20	14	13	25	25	15	15	15	15	9

*1：「技能統合型」

論理性を高めるためのスピーキング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅲ	学年	3	形態	HR・ 習熟度 ・小集団
-----	--------------	----	---	----	--

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は発展クラスのうち1クラス28名（男子6名女子22名）の生徒で、英語への興味・関心が高い。半数以上の生徒が英検2級を取得しており、学年全体の概ね9割が大学・短大に進学する。授業中の態度はまじめであり、ペアワークやグループワークなどの活動にも積極的に取り組む。

解決すべき課題

ほとんどの生徒が英語で自分の意見を述べることには慣れているが、思いつままに話してしまうため、発話が論理的に整理されていない生徒が多い。そのため意見交換や議論があまり深まっていけない。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・英語学習に関する意識調査（4月実施：回答者数25）*人数（%）

1. 英語の4技能のなかで、最も苦手と感じているものはどれですか。

話す力	聞く力	読む力	書く力
11 (44.0%)	4 (16.0%)	8 (32.0%)	2 (8.0%)

2. 英語を話すことが好きですか。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
13 (52.0%)	8 (32.0%)	3 (12.0%)	1 (4.0%)

3. 英語を人前で（対話を含む）話すことに抵抗がありますか。

ある	どちらかといえばある	どちらかといえはない	ない
10 (40.0%)	7 (28.0%)	5 (20.0%)	3 (12.0%)

<分析と考察>

英語を話すことについては、8割以上の生徒が「(どちらかといえば)好き」と回答しているが、最も苦手な技能であると自覚している生徒も多いことがわかった。授業では概ね積極的に話す活動に取り組んでいるが、7割近い生徒が人前で話すことに抵抗感を感じていた。これらの結果から、スピーキングを重点的に指導する意義を確認した。

・第1回スピーキングテスト（6月実施：受験者数26）

テスト内容：生徒自身の意見を問う質問(1問)を出題し、応答に対してさらにもう1題質問をする。

評価方法：自作ルーブリックによる分析的評価

	理解	論理性	正確さ	発音	流暢さ・明瞭さ
5		意見とそれに対する理由や例を述べており、詳細な説明も継続的に話すことができ、考えのつながりが明確で筋が通っている。			
4	必要に応じて聞き返ししながら、面接官の質問を理解し、確認の際に自分のことばに言い換えて表現できている。	意見とそれに対する理由や例を述べており、説明は十分とは言えないが、考えのつながりはほぼ明確である。	文法上のミスがほとんどなく、伝えようとしていることが正確に伝わっている。	・母音や子音について日本語の音の代用をほぼせずに発音できている。 ・アクセントは概ね正確である。	・概ね十分な声量ではっきりと話している。 ・ほとんど沈黙することなく話を続けている。
3	必要に応じて聞き返ししながら、面接官の質問を理解し、不自然な間がなく応答ができている。	意見とそれに対する理由を最低1つは述べているが、同じ内容の繰り返しであったり、意味が明確でなかったりするところがある。	文法にややミスがあるものの、内容伝達に支障がない	・時々、母音や子音について日本語の音の代用をして発音することがまれにある。 ・アクセントのミスがまれにある。	・聞き取りにくいこともあるが、十分な声量で話している。 ・多少沈黙することもあるが話を続けている。
2	面接官の質問を1～2回聞き返したが、理解して応答するのに時間がかかっている。	意見は述べているが、その理由は示していない、あるいは理由がわかりづらい。	文法にミスあり、時折内容伝達に支障がある。	・母音や子音について日本語の音の代用をして発音していることが多い。 ・アクセントのミスが多い。	・不明瞭で聞き取りにくい部分が多い。 ・沈黙することが多く、話がとぎれがちである。
1	質問を2度くり返しても理解ができていない。	質問に答えられない、または無関係の応答である。	時折、主語・動詞がないなど、文法に致命的ミスがあり、内容伝達に大きく支障がある。	・ほとんどの母音や子音について日本語の音の代用をして発音している。 ・アクセントのミスが非常に多い。	・終始、声量が不十分であり不明瞭で聞き取りにくい。 ・沈黙が多く理解に支障をきたす。

結果：人数 (%)

	理解	論理性	正確さ	発音	流暢さ・明瞭さ
5		4 (15.4%)			
4	10 (38.5%)	12 (46.2%)	5 (19.2%)	5 (19.2%)	5 (19.2%)
3	16 (61.5%)	8 (30.8%)	11 (42.3%)	16 (61.5%)	18 (69.2%)
2	0 (0.0%)	2 (7.7%)	9 (34.6%)	5 (19.2%)	3 (11.5%)
1	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (3.8%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)

<分析と考察>

大きな課題が見られるのは「正確さ」である。これは緊張や焦りから、決められた時間内に、自分の意見を瞬時に英語に変換することができないことが原因と考えられる。また、問いに対する意見やその理由を述べるができる生徒（5点中3点以上）が9割以上であるが、具体例や十分な説明を述べられていない。このことから、「正確さ」と「論理性」の向上に焦点を当てて手だてを考える必要があると考えた。

リサーチ・クエスチョン

身近な話題について、論理的に意見を述べることができるようにするには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：評価ルーブリックの項目で、論理性の評価が 5 点満点中 4 点以上になる生徒が 8 割以上になる。また、正確さの評価が 4 点満点中 3 点以上になる生徒が 8 割以上になる。

改善のための手だて

- 短時間で自分の言いたいことを英語で言う練習をくり返し行えば、自分の考えをより早く正確に話せるようになるだろう。
 - ・発話する内容について、準備する時間を段階的に短くしながら練習する。
 - ・場面にふさわしいチャンクや表現を指導する。
 - ・聞き手として、「反応・質問・コメントをする」など、話しやすい雰囲気をつくるよう指導する。
- 論理構成を明示的に指導し、練習させれば、説得力のある意見を述べられるようになるだろう。
 - ・「意見－理由－付加説明」の論理的つながりについてワークシートを用いて説明する。
 - ・「意見－理由－付加説明」からなる発話のトランスクリプトを読み、論理性を確認したり、説得力ある発言に役立つポイントについて考えさせたりする活動を行う。
 - ・3 人 1 組になり、1 人がクラスメイト 2 人の対話を聞き、それぞれの意見に対して、より説得力のある論理の組み立てについてコメントをし、活動を行う。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・第 2 回スピーキングテストについて－中間測定（9 月実施：受験者数 26）

テスト内容：生徒自身の意見を問う質問(1 問)を出題し、応答に対してさらにもう 1 題質問をする。
評価方法：自作ルーブリックによる分析的評価

最も変化があったのは「流暢さ・明瞭さ」であり、6 月のテストでは 4 点を取ったものが 5 人(19.2%)のみであったが、9 月のテストでは 14 人(53.8%)が 4 点を取ることができた。流暢さが向上したことにより発話の情報量が増え、それに伴って「論理性」も向上してきているといえる。「正確性」に関しては、ほとんどの生徒が内容伝達に支障があるミスをしなくなったが、改善の余地がみられる。

- ・第 3 回スピーキングテスト結果（12 月実施：受験者数 26）

テスト内容：生徒自身の意見を問う質問(1 問)を出題し、応答に対してさらにもう 1 題質問をする。
評価方法：自作ルーブリックによる分析的評価
結果：人数 (%)

	理解	論理性	正確さ	発音	流暢さ・明瞭さ
5		10 (38.5%)			
4	13 (50.0%)	15 (57.7%)	6 (23.1%)	8 (30.8%)	19 (73.1%)
3	12 (46.2%)	1 (3.8%)	19 (73.1%)	18 (69.2%)	7 (26.9%)
2	1 (3.8%)	0 (0.0%)	1 (3.8%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
1	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)

<分析と考察>

論理性の評価項目で、5点満点中4点以上になる生徒の割合は96.2%、正確性は4点満点中3点以上になる生徒の割合も96.2%になり改善の目安に達し、それぞれの項目で有意な向上が見られた(Wilcoxonの符号付順位検定:いずれも $p=0.00<0.05$)。生徒は意見や理由に対する具体例や補足説明をすることに慣れ、意見をより説得力のあるものにならせた。ペアの練習において、聞き手に注意して聴いてほしい項目を話し手に事前に述べさせたり、聞き手に具体的なフィードバックをすることを意識させたりしたことで、生徒は自身の課題を意識しながら練習に臨むことができたと思われる。生徒は、ペア活動で聞き手として具体的にフィードバックをする活動を通して自身の話す英語をより客観的に分析できるようになったと話している。また、テスト実施後に記入させた自己評価シートでは、「論理構成を意識して話す習慣がついた」「流暢さが上がった」と述べている生徒が多く、英語を話すことへの抵抗がなくなってきたことがうかがえる。

教師の変化

今回の研究を通して、事前に生徒の課題を把握し、課題克服のための具体的な手だてを見つけ、計画的に授業改善に取り組むことができた。また、授業内での生徒に対するフィードバック方法も変化した。発表をしたペアに対して教師がさらに情報を引き出す質問をし続けたり、問いに対する解答例を文字化して提示したりすることで、生徒が個々の課題改善方法を具体的に理解できるよう工夫をするようになった。

今後の課題(次の改善点など)

くり返し練習をしていく過程で、生徒は語彙の不足や文章構築の遅さを補うために、また聞き手を待たせないようにと発言しやすいことを言おうとする傾向にあった。コミュニケーションにおいては、本当に伝えたいことを伝えようとする姿勢が大切であるということを継続的に指導する必要がある。また、生徒がより発展的な話題についても対応できるよう、語彙力や表現力の増強も必要である。

まとめ・感想

本研究を通して、日々の授業において生徒に身につけさせたい力や課題を、教師である自分自身が一番に理解し、具体的な手だてを考えることの重要性を改めて感じた。課題克服のために一つひとつの授業でどのような目的でどのような指導・活動を実践していくかということは、今後の授業においても考え続けていきたい。本研修では、複数の講師陣から具体的な助言や提案をいただき、他の受講者と情報共有をしたおかげで指導のしかたや改善方法について深く学ぶことができた。この研修に参加できたことに心から感謝を申し上げたい。そして今後もさらなるアクション・リサーチの研究課題を自身の授業のなかに見出し、絶えず自己研さんに努めていきたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

植田一三・妻鳥千鶴子.(2004).『英語で意見を論理的に述べる技術とトレーニング』ベレ出版.
照屋華子・岡田恵子.(2001).『ロジカル・シンキング』東洋経済新報社.

日常的な事柄を説明する力を育てるスピーキング指導

科目名	コミュニケーション英語 I	学年	1	形態	HR・習熟度・ 小集団
-----	---------------	----	---	----	--------------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は2クラス36名（男子19名，女子17名）の生徒である。進路希望に関しては，4割が専門学校，3割が大学・短大進学，3割が就職を目指しているのが例年の傾向である。基礎的な文法知識や語彙が十分に身につけておらず，英語について苦手意識を持っている生徒も多い。授業に対しては前向きで，真面目に取り組む生徒も多いが，学習意欲があまりない生徒や，ペアやグループでの活動に積極的ではない生徒もおり，教師の配慮や支援が必要な場面が多くある。

解決すべき課題

英語を話すことに自信がなく，基礎的な語彙・文法も身につけていないため，話す活動に積極性が見られない生徒が多い。他者とのコミュニケーション自体に苦手意識を持っている生徒も少なくない。英語の授業を通して，人前で話したり，やり取りしたりすることに慣れてほしい。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・第1回アンケート（5月実施：回答者数25）

1. あなたは英語の学習が好きですか，嫌いですか？

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
2人 (8.0%)	5人 (20.0%)	6人 (24.0%)	12人 (48.0%)

2. 英語を話す力はこれからの生活のなかで必要だと思いますか？

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
9人 (36.0%)	9人 (36.0%)	5人 (20.0%)	2人 (8.0%)

<分析と考察>

アンケート調査から，7割以上の生徒が「英語の学習が嫌い」だという意識を持っていることがわかった。一方で，7割以上の生徒は「英語を話す力はこれからの生活のなかで必要だ」と考えており，それらを踏まえ，スピーキング力の向上によって英語学習への意欲も高めたいと考えた。

・第1回スピーキングテスト（7月実施：評価対象者数 32）

テスト内容：英検準2級2次試験問題の問2（Picture A に描かれている人の動作の描写）、問3（Picture B に描かれている状況の描写）

評価方法：自作ルーブリックによる評価

評価	動作の描写	状況の描写	流暢さ、態度
5	5つの異なる動作を適切に描写している。	状況を論理的に説明している。表現方法も適切である。	
4	4つの異なる動作を適切に描写している。	状況を論理的に説明している。表現方法もほぼ適切である。	
3	3つの異なる動作を適切に描写している。	状況の説明になっているが、最小限の情報にとどまっている。表現方法において誤解を生じるような大きな誤りはない。	十分な声量で、相手の目を見てわかりやすく伝えようとしている。
2	2つの異なる動作を適切に描写している。	状況の説明として不十分な点が多い。表現方法も不適切である。	十分な声量ではあるが、話し方にぎこちなさがあり、たびたび沈黙することがある。
1	1つの異なる動作を適切に描写している。	状況の説明になっていない。または、答えられない。	声量が不十分で、沈黙が多い。

結果：

評価	動作の描写	状況の描写	流暢さ、態度
5	0人（0.0%）	0人（0.0%）	
4	2人（6.3%）	1人（3.1%）	
3	2人（6.3%）	6人（18.8%）	8人（25.0%）
2	8人（25.0%）	0人（0.0%）	12人（37.5%）
1	20人（62.5%）	25人（78.1%）	12人（37.5%）

<分析と考察>

「動作の描写」に関しては、3の評価以上の生徒が約12%に留まった。その動作をどうことばにすればよいのかわからない、わかったとしても英語の表現がわからない、という生徒が多かったのではないかと推察された。「状況の描写」では、キーワードは出てくるものの、適切な文にならないために、聞き手の理解に支障をきたす例が多く見られた。「流暢さ、態度」に関しては、3割以上の生徒が、イラストのカードを凝視したまま話し相手を一切見ないままであり、ジェスチャーやアイコンタクトによって、伝える気持ちを持って話すことも指導する必要があると考えた。

リサーチ・クエスチョン

写真や図の説明を、聞き手にわかりやすいように自信を持って、口頭でできるようにするにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：・ルーブリック評価の各項目で3以上になる生徒が全体の7割以上になる。

・アンケートで「英語を話すことについて自信がついたと思う」と答える生徒が全体の7割以上になる。

改善のための手だて

- 発話のリズムや速度について、音声指導や練習を行えば、聞き手にわかりやすい話し方が身につくだろう。
 - ・アクセント、イントネーション、区切りについて明示的な指導を行う。
 - ・教科書英文を使って、相手に伝えることを意識した音読練習を行う。
- 身近な話題や知っていることに関する写真や図について、話す活動を継続すれば、簡単な英語で説明することに慣れ、自信が高まるだろう。
 - ・簡単な英語で説明するためのフレームを与えて、文の形で話す習慣を身につけさせる。
 - ・身近な話題に関する写真や図について、ペアやグループで説明し合う練習をさせる。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・第2回アンケート（12月実施：回答者数 22）

1. あなたは英語の学習が好きですか、嫌いですか？

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
6人 (27.2%)	6人 (27.2%)	6人 (27.2%)	4人 (18.1%)

2. 英語を話す力は伸びたと思いますか？

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
7人 (31.8%)	6人 (27.2%)	5人 (22.7%)	4人 (18.1%)

<分析と考察>

第1回アンケートと比較して、1の質問に対して、「(どちらかといえば)好き」と答える生徒の割合が増え、半数以上の生徒が、英語学習に対して肯定的な意識を持てるようになったようである。2の質問に関しては目標値である7割には到達しなかったものの、約6割の生徒が「(どちらかといえば)伸びたと思う」と答え、授業での取組に、一定の成果があったといえるだろう。

- ・第2回スピーキングテスト（12月実施：評価対象者数 24）

結果：

評価	動作の描写	状況の描写	流暢さ、態度
5	0人 (0.0%)	2人 (8.3%)	
4	2人 (8.3%)	1人 (4.2%)	
3	5人 (20.8%)	4人 (16.7%)	9人 (37.5%)
2	4人 (16.7%)	8人 (33.3%)	10人 (41.7%)
1	13人 (54.2%)	9人 (37.5%)	5人 (20.8%)

<分析と考察>

それぞれの観点で、改善の目安には到達しなかったものの、3以上の評価の割合は増加した。事前・事後のデータがそろっている24名について、ループリックの3観点の事前・事後の評価データを検定(Wilcoxonの符号付順位検定)にかけたところ、3観点すべてにおいて有意な向上が認められた(それぞれ $p=0.00<0.05$)。特に、「動作の描写」については、授業内でくり返し行ったイラストや写真の描写によって、話すことに慣れ、S+V構造を意識して答えられるようになったことで、最も大きな改善が見られた。

教師の変化

今回、事前に生徒へのアンケートやテストを行い、具体的な数値として分析することで、生徒の意識や話す力の現状を、教師の想像ではなく、客観的な事実として把握することができた。それにより、これまででは、ただ教科書に沿って、それぞれのトピックを中心にした授業展開をしてきたが、生徒の目標やニーズに基づいた指導法や活動を考えることができるようになった。

今後の課題(次の改善点など)

- ・スピーキング活動については、ただ練習させるだけでなく、事後に、多く見られた誤りや関連するさまざまな表現を共有するなど、フィードバックの時間を設ける。
- ・動作や状況の描写は見たことをそのまま表現するタスクであったが、今後、自分の考えを入れたやり取りの形に発展させたい。

まとめ・感想

この研修を振り返り、生徒第一の授業づくりの大切さを改めて感じる事ができた。これまでもさまざまな活動や取組を行ってきたが、今思えば必ずしも生徒の目線に立った目標設定やニーズに沿ったものでなかったように思う。事前のアンケートやプレテストで生徒の実態を把握し、それをもとに授業展開や活動を考えることで、生徒が身につけたい力を踏まえた授業展開を考えることができたと感じる。また、描写する練習の題材を“Critical Thinking”の視点で検討することで、今まで以上に教材研究の幅が広がり、生徒に多角的な視点で物事を考えさせることを意識するようになった。それと同時に、一つひとつの活動について目的や成果を再検討することで、指導目標を意識した授業を行うことができた。今回、アクション・リサーチによる枠組のなかで、このような改善ができたが、アンケートの質問項目やループリックの記述文の設定等、終えた今だからこそ気づく課題もある。今後も、「生徒が英語を使って何ができるようになるのか」をつねに念頭に置きながら、「生徒第一」の考えのもと指導にあたっていきたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

佐野正之(編著). (2000). 『アクション・リサーチのすすめ』大修館書店.

聞き手の理解を意識しながら会話を継続させるスピーキング指導

科目名	英語表現 I	学年	1	形態	HR・習熟度・ 小集団
-----	--------	----	---	----	--------------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は6クラス117名（男子60名、女子57名）の生徒である。多くの生徒が落ち着いて授業に参加している。おとなしい生徒が多いが、自分の考えや意見は持っている。しかし、積極的にそれらを発信することや、自分のことばで表現することが苦手な生徒が多い。進路は、約9割の生徒が4年制大学進学を、約1割が専門学校進学を希望している。進学については、学校推薦型選抜を希望する生徒が多い。

解決すべき課題

英語でやり取りをするうえで、自発的に聞きたいことを質問して会話を広げる力をつけてほしいと考えているが、会話を継続するために必要な英語の疑問文が即座に言えない生徒や、聞き取りや応答が困難になると日本語を使ってしまう生徒が多い。また、本当に伝えたい部分を強調するなど、相手の理解を促すような話し方を意識できていない。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・アンケート調査－英語の授業にかかわるアンケート（4月実施：回答人数96）

Q1. 英語の授業でどのような知識や力を伸ばしたいと思いますか。1～3個選んでください。

英語を聞く力	英語を話す力	英語を読む力	英語を書く力	単語・熟語力	文法の知識
62人 (64.6%)	69人 (71.9%)	38人 (39.6%)	27人 (28.1%)	28人 (29.2%)	39人 (40.6%)

Q2. 英語を話すことについて、どのようなことを話せるようになりたいですか。すでにできていると思うこと以外で、1～2個選んでください。

自分・家族・学校などの紹介	身近なことがらについての簡単な説明	聞いたり読んだりしたことに対する簡単な意見・感想	身近な話題に関する意見	社会的な問題に関する意見
16人 (16.7%)	43人 (44.8%)	40人 (41.7%)	43人 (44.8%)	17人 (17.7%)

Q3. あなたは英語が得意だと思いますか、苦手だと思いますか。

得意	どちらかといえば得意	どちらかといえば苦手	苦手
1人 (1.0%)	26人 (27.1%)	26人 (27.1%)	43人 (44.8%)

7割を超える生徒が「英語を話す力」を伸ばしたいと考えていて、身近なことがらや話題について話せるようになりたいという生徒が特に多いことがわかった。また、半数以上が英語に苦手意識を持っていることから、話す力の向上によって自信を持たせたいと考えた。

・会話活動の観察評価と自己評価（6月）

＜ループリック＞

	A	B	C
質問力	決められたやり取りに加えて、質問を3回以上することができる。	決められたやり取りに加えて、質問を2回することができる。	決められたやり取りに加えて、できる質問が1回以下である。
応答力	質問を理解し、必要な応答に加えて追加情報を伝えることができる。	質問を理解し、簡単な応答（主語と動詞を含む）ができる。	適切な応答をすることができない。
話し方	適切な文法を使いながら、相手が理解できる発音、速さで話し、さらに強調するなどの工夫が見られる。	適切な文法を使いながら、相手が理解できる発音、速さで話している。	文法使用、発音、速さなどが適切でなく、相手の理解を妨げることがある。

＜教師による観察評価の結果：対象人数 115＞ トピック：「行ったことがある場所」

	A	B	C
質問力	1人 (0.9%)	13人 (11.3%)	101人 (87.8%)
応答力	1人 (0.9%)	111人 (96.5%)	3人 (2.6%)
話し方	0人 (0.0%)	10人 (8.7%)	105人 (91.3%)

＜生徒による自己評価の結果：回答人数 106＞

	A	B	C
質問力	1人 (0.9%)	37人 (34.9%)	68人 (64.2%)
応答力	9人 (8.5%)	81人 (76.4%)	16人 (15.1%)
話し方	8人 (7.6%)	63人 (59.4%)	35人 (33.0%)

スピーキングテストに代わる観察評価では、決められた以外の質問によって自発的に会話を広げられない生徒が多く、相手の理解を意識しながら話せる生徒もとても少なかった。また、質問に対して簡単な応答は行える生徒は多かったが、さらに情報を付け足して答えられる生徒は少なかった。生徒による自己評価では、観察評価よりも「応答力」でC評価が多かったが、「主語と動詞を含む文」での発話に自信がない生徒が思ったよりいることが推察された。

リサーチ・クエスチョン

身近なテーマについて、聞き手の理解を意識しながら、英語でやり取りを継続する力を身につけさせるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：・ループリックによる会話活動の観察評価で、各項目の評価が、B以上になる生徒が全体の8割以上になる。

・ループリックによる会話活動の自己評価で、各項目の評価が、B以上になる生徒が全体の8割以上になる。

改善のための手だて

- 質問のしかたを指導し、練習させれば、自ら話題を広げながら会話を続けられるようになるだろう。
 - ・会話を継続するために必要な質問のしかた（疑問文の作り方）を明示的に指導する。
- スピーキングストラテジーを指導すれば、会話を継続させることに役立つだろう。
 - ・聞き手のストラテジーとして、リアクションのしかた、聞き返しの表現などを指導する。
 - ・話し手のストラテジーとして、うまく言えないことを簡単な英語で言い換えることを指導する。
- 会話相手の発話内容を他者に伝える活動を行えば、相手の報告によって自分の発話の伝達が確認でき、わかりやすく伝えようとする意識が高まるだろう。
 - ・ペアワーク後に、他のペアにそれぞれのパートナーが話した内容について報告させる。
 - ・わかりやすく伝えるための話し方（強調、くり返し、適切な区切りなど）を明示的に指導する。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

※各[]内の数字は前回調査における割合

- ・アンケート調査—事後調査（12月実施：回答人数 111）

Q1. あなたは英語が得意だと思いますか、苦手だと思いますか？

得意	どちらかといえば得意	どちらかといえば苦手	苦手
5人 (4.5%) [1.0%]	33人 (29.7%) [27.1%]	39人 (35.2%) [27.1%]	34人 (30.6%) [44.8%]

Q2. 英語の授業でどのような知識や力を伸ばしたいと思いますか？1～3個選んでください。

英語を聞く力	英語を話す力	英語を読む力	英語を書く力	単語・熟語力	文法の知識
60人 (54.1%) [64.6%]	84人 (75.7%) [71.9%]	34人 (30.6%) [39.6%]	32人 (28.8%) [28.1%]	23人 (20.7%) [29.2%]	35人 (31.5%) [40.6%]

Q3. 英語を話すことについて、どのようなことを話せるようになりたいですか。すでにできていると思うこと以外で、1～2個選んでください。

自分・家族・学校などの紹介	身近なことがらについての簡単な説明	聞いたり読んだりしたことに対する簡単な意見・感想	身近な話題に関する意見	社会的な問題に関する意見
16人 (14.4%) [16.7%]	56人 (50.5%) [44.8%]	43人 (38.7%) [41.7%]	54人 (48.6%) [44.8%]	16人 (14.4%) [17.7%]

苦手意識を抱えている生徒がまだ多いが、割合はやや減少し、統計学的有意差も認められた (Wilcoxon の符号付順位検定: $p = 0.00 < 0.05$)。また、引き続き「英語を話す力」を伸ばしたいと考えている生徒と、身近なことがらや話題について話せるようになりたい生徒が多いことがわかった。やり取りのテーマは、「友だちや家族」「初めて経験したこと」など、話しやすいものから難しいものまで、さまざまなものを扱ってきたが、身近なテーマということもあり、多くの生徒が活動に興味を持って取り組めたようである。今回の活動をとおり、生徒の「もっと英語を話す力を伸ばしたい」「もっと身近なことがらや話題について話せるようになりたい」という気持ちが高まったと思われる。

・会話活動の観察評価と自己評価（12月）

＜教師による観察評価の結果：対象人数 115＞ トピック：「年末年始にしたこと」

	A	B	C
質問力	11人 (9.6%) [0.9%]	79人 (68.7%) [11.3%]	25人 (21.7%) [87.8%]
応答力	26人 (22.6%) [0.9%]	88人 (76.5%) [96.5%]	1人 (0.9%) [2.6%]
話し方	7人 (6.1%) [0.0%]	96人 (83.5%) [8.7%]	12人 (10.4%) [91.3%]

＜生徒による自己評価の結果：回答人数 111＞ *複数回の活動後

	A	B	C
質問力	72人 (64.9%) [0.9%]	36人 (32.4%) [34.9%]	3人 (2.7%) [64.2%]
応答力	46人 (41.4%) [8.5%]	64人 (57.7%) [76.4%]	1人 (0.9%) [15.1%]
話し方	34人 (30.6%) [7.6%]	71人 (64.0%) [59.4%]	6人 (5.4%) [33.0%]

観察評価では、「応答力」に加えて「話し方」でB以上の生徒の割合が改善の目安の8割を超えた。特に「応答力」ではA評価が大きく増加した。「質問力」は目標に届かなかったが、12.2%から78.3%へと大きな改善が見られ、手だての効果はあったといえる。自己評価ではB以上の評価が各項目で9割を超えていることから、生徒の達成感も高まったと推察される。全体的に観察評価より評価が高いのは、複数回のなかに特に話しやすいトピックがあったためだと思われる。なお、観察評価および自己評価の各項目のデータの伸びをWilcoxonの符号付順位検定にかけたところ、全項目で有意差が認められた（それぞれ $p = 0.00 < 0.05$ ）。

教師の変化

生徒のニーズを的確に把握し、授業の目標や活動の目的を共有したうえで、それらを意識した授業の計画や実施ができるようになった。また、同僚の教師と協力して活動を実施したり、情報を共有したりするなかで、協働的に授業やテスト、評価方法を改善していこうという意識を持てるようになった。

今後の課題（次の改善点など）

相手意識を持って英語のやり取りを継続させるという目標は、ひとまず達成することができたが、表面的な情報交換だけではなく、さらに内容を深めるようなやり取りができるような指導をしていきたい。

まとめ・感想

これまでは、よいと感じた活動を場当たり的に取り入れたりしながら授業をしていた。その活動に興味を持てた生徒など、一部の生徒には効果があったが、より多くの生徒のニーズや課題を把握できていなかったことから、生徒全体に対して大きな成果を上げることはできなかった。今回のアクション・リサーチで、生徒のニーズを把握し、生徒と目的・目標を共有しながら改善に取り組むことができた。

個人としてのアクション・リサーチの経験はもちろんだが、指導と評価の一体化や、チームとして指導にあたる大切さなど、組織的な授業改善についての知識や考え方を得られたことは、大きな収穫である。今後、学んだ知識や技能を他の教員と共有し、組織的な授業改善の取り組みを牽引していきたい。

効果的な支援を工夫したスピーキング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学年	2	形態	HR・ 習熟度 ・小集団
-----	--------------	----	---	----	--

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は2クラス59名（男子24名，女子35名）の生徒である。一般受験をする生徒は少なく，約8割の生徒が指定校推薦やAO入試を利用して4年制大学や短期大学，専門学校に進学することを希望している。英語に苦手意識を持っている生徒が多いが，授業中の活動には積極的に取り組んでいる。

解決すべき課題

- ・英語で話すことに慣れておらず，質問に対して単語のみで返答するなど，文の形で話すことが難しい。
- ・カタカナを読んでいるかのような発音で，英語らしい発音ができていない。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

- ・英語の学習に関するアンケート調査（7月実施：回答者数 59）

1. あなたは英語を「話すこと」が得意だと思いますか。苦手だと思いますか。＊人数（％）

得意	どちらかといえば得意	どちらかといえば苦手	苦手
0 (0.0%)	4 (5.9%)	26 (38.2%)	38 (55.9%)

2. あなたは英語のどのような知識や力を伸ばしたいと思いますか。（3つまで選択）＊人数（％）

聞く力	話す力	読む力	書く力	単語や熟語	文法
36 (61.0%)	41 (69.5%)	32 (54.2%)	24 (40.7%)	19 (32.2%)	24 (40.7%)

<分析と考察>

英語を話すことについて9割以上の生徒が苦手意識を持ち，伸ばしたい力として英語を話す力が最も多くの回答を集めていることから，生徒の話す力の向上を目指した授業改善が必要だと考えた。

- ・スピーキングテスト（8月実施：受験者数 51）

テスト内容：夏休みの予定について，ショートスピーチの形で説明する。

（動画で撮影し，Google Classroomで提出）

評価方法：自作ルーブリックによる分析的評価

	正確さ	発音	内容
A	S+V を含んだ正確な文の形を使い、言いたいことがきちんと伝わる。	英語らしい発音、リズム、イントネーションで話している。	トピックについて、具体例を挙げながら詳しく説明している、自分の考え等も述べている。
B	S+V を含んだ文の形に多少誤りがあるが、何とか言いたいことは伝わる。	ときどきカタカナ英語が混ざることがあるが、概ね英語らしい発音、リズム、イントネーションで話している。	トピックについて、具体例を挙げながら簡潔に説明している。
C	S+V を含んだ文の形に誤りが多く、言いたいことがあまり伝わらない。	英語らしい発音、リズム、イントネーションで話せていない。	トピックについて、必要最小限の概要のみを述べている。

結果：*人数 (%)

	正確さ	発音	内容
A	7 (13.7%)	4 (7.8%)	4 (7.8%)
B	38 (74.5%)	18 (35.3%)	22 (43.1%)
C	6 (11.8%)	29 (56.9%)	25 (49.0%)

発話語数の分析

平均値	最大値	最小値	標準偏差
28.5	62	4	10.32

<分析と考察>

「正確さ」の項目では S+V を含んだ形に誤りが多かった生徒の割合は 11.8%にとどまったが、発話量が少なく、誤りが生じにくかったことによる結果だと考えられる。「発音」では、過半数の生徒が英語らしい発音、リズム、イントネーションができておらず、指導の必要があるということがわかった。「内容」については、トピックに関する概要のみを述べ、具体的に話せていない生徒が 49.0%を占めていたことから、より詳しい内容を英語で話す練習を行う必要があると感じた。

リサーチ・クエスチョン

身近な話題について、適切な文構造と話し方で、より具体性のある説明を英語でできるようにするには、どのような指導をすればよいか。

- 改善の目安：
- ・スピーキングテストのルーブリック評価で、各項目 B 以上の生徒が、それぞれ全体の 7 割以上になる。
 - ・アンケート調査で、「英語を話す力が身についてきた」と答える生徒が、全体の 7 割以上になる。

改善のための手だて

- 日常的な話題について、できるだけ多くの情報を伝え合う練習をさせれば、内容が豊かな発話ができるようになるだろう。
 - ・質問に対しての答えに加え、その理由や補足情報を述べるように、事前に発話の準備をさせる。
 - ・会話のフレームを使って、1つのトピックについて複数回やりとりが行われるようにする。

- 会話活動のなかで疑問文等の文構造を指導すれば、より正確な英語で発話できるようになるだろう。
 - ・事前に発話のモデルを示しながら、S+V 構造について明示的に指導する。
 - ・スピーチのフレームを使って、S+V 構造を意識した発話の準備をさせる。
 - ・フレームによる支援を段階的に減らし、自力で文の形の発話ができるようにする。
- 教科書英文の音読練習で明示的な音声指導を行えば、より英語らしく発話できるようになるだろう。
 - ・教科書英文から特に発音、リズム、区切りなどに注意したい文を選び、音声指導を行う。
 - ・スマートフォンの音声認識システムを利用し、正確な発音の練習をさせる。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・英語の学習に関するアンケート（12月実施：回答者数 51）

1. これまでの英語の授業で、以前より英語を話す力は身についたと思いますか。*人数 (%)

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
9 (17.6%)	33 (64.7%)	7 (13.7%)	2 (3.9%)

2. あなたは英語を「話すこと」が得意だと思いますか。苦手だと思いますか。*人数 (%)

得意	どちらかといえば得意	どちらかといえば苦手	苦手
0 (0.0%)	4 (7.8%)	18 (35.3%)	29 (56.9%)

<分析と考察>

「以前より英語を話す力は身についた」という生徒は全体の 8 割を超え、英語を話す練習を継続的にしてきたことに一定の成果はあったと考えられる。その一方で「英語を話すことが得意」と答えた生徒の割合は、依然かなり少なかった。その原因としては、多くの生徒が、話すことを思いつくようになったものの、語彙不足などにより思うように英語で表現できない、という段階にいることが考えられる。粘り強い指導の継続が必要である。

- ・スピーキングテスト（12月実施：受験者数 55）

テスト内容：冬休みの予定について、ショートスピーチの形で説明する。

（動画で撮影し、Google Classroom で提出）

評価方法：自作ループリックによる分析的評価

結果：*人数 (%)

	正確さ	発音	内容
A	13 (23.6%)	5 (9.1%)	15 (27.3%)
B	40 (72.7%)	25 (45.5%)	32 (58.2%)
C	2 (3.6%)	25 (45.5%)	8 (14.5%)

発話語数の分析

平均値	最大値	最小値	標準偏差
37.3	68	9	11.71

<分析と考察>

「正確さ」「内容」で B 評価以上の生徒の割合は、それぞれ 96.3%、85.5%となり、目標値に達した。比較可能なデータについて検定 (Wilcoxon の符号付順位検定) を行ったところ、有意な向上が認められた (順に $p=0.03, 0.00<0.05$)。「発音」については、B 以上の生徒の割合は増加したものの、目標値には届かず、有意差も認められなかった ($p=0.09$)。一方、発話語数の平均値は 28.5 から 37.3 まで向上し、有意差も認められた (対応のあるデータの t 検定: $p=0.00<0.05$)。依然として最大値・最小値の差も標準偏差も大きく、個人差が気になるところであるが、発話語数が少なかった生徒の多くが顕著に伸びており、よい傾向がうかがえた。これらのデータ分析から、特に生徒の発話の「内容」が最も改善されたことが確認できた。フレームを使った会話練習を帯活動として継続したことで、発話内容の膨らませ方がある程度身につけてきたと推察される。

教師の変化

- ・目標や評価規準を明確にした授業づくりを行うようになったことで、活動の取捨選択ができ、授業デザインが円滑に行えるようになった。
- ・生徒の英語を話す力を伸ばすための活動を増やしたことで、会話表現や話し方など、話すための英語の指導について自らが学ぶことができた。
- ・スマートフォンの音声認識システムを使った発音練習、スピーチ動画の提出とその採点や分析など、ICT をさまざまな場面で活用することができるようになった。

今後の課題 (次の改善点など)

- ・発音については文単位での音の強弱や連結を中心に発音指導を行ってきたが、改善の目安を下回る結果となったため、今後は一つひとつの音素や単語レベルでの発音指導も必要である。
- ・帯活動として行ってきたペアによる会話練習において、生徒の発話は基本的に事前に与えられた質問に対して用意した内容を話す形式だったが、今後はより実践的なコミュニケーション能力を育成するために、会話を続けるためのストラテジーの指導や、即興で会話する練習を行う必要がある。

まとめ・感想

授業における課題に対して具体的な目標を立て、中長期的に改善に取り組むという経験は今回が初めてのことだった。これまでも授業改善に取り組んできたつもりではいたが、どれも短期的な取組でデータを取ることもなかったため、成果を裏付ける根拠はないに等しいものだった。目標と達成度を測るテスト、そこに向けた手だてを十分に練り実践することで、継続的かつ一貫性のある指導が可能になるのを強く感じることができた。今後もアクション・リサーチの手法を活かし、自分自身だけでなくチームで組織的な授業改善を行っていけるように努めていきたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

佐野正之(編著). (2000). 『アクション・リサーチのすすめ』 大修館書店.

主体的な読解を促すリーディング指導

科目名	コミュニケーション英語 I	学年	1	形態	HR・習熟度・小集団
-----	---------------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は2クラス80名（男子22名，女子58名）の生徒である。例年，全体の9割程度が大学・短大・専門学校へ進学するが，指定校推薦やAO入試の利用がほとんどである。授業や課題への取組は概ねよいが，生徒の習熟度には大きな差があり，英語に対する苦手意識を強く持つ生徒が多い。

解決すべき課題

英文読解に際し，指示されたタスクには取り組む姿勢を見せるが，自らの力で読むことに自信がないためか，設問への解答の様子を見ると，教師の解説を待ってしまう生徒が多い。主体的に自信を持って英文読解に臨み，的確に内容を把握する力を育てたい。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

- ・第1回 アンケート（5月末実施：回答者数80名）

1. あなたは英語の学習が好きですか，嫌いですか。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
23人 (28.8%)	25人 (31.3%)	26人 (32.5%)	6人 (7.5%)

2. あなたは英語が得意だと思いますか，苦手だと思いますか。

得意	どちらかといえば得意	どちらかといえば苦手	苦手
0人 (0.0%)	22人 (27.7%)	26人 (32.5%)	32人 (40.0%)

- ・第1回 読解力テスト（7月実施：受験者数78名）

英検3級，準2級の読解問題を使って，生徒の読解力の現状を調べた。

英検3級（1点×5問：問1～4 要点問題，問5 概要問題） ※人数 (%)

得点	0点	1点	2点	3点	4点	5点	平均
人数	0 (0.0)	2 (2.6)	7 (7.7)	22 (28.2)	34 (43.6)	14 (18.0)	3.3点

	問1	問2	問3	問4	問5
問題別正答率	53.9%	80.8%	96.2%	76.9%	59.0%

英検準2級（1点×4問：すべて要点問題） ※人数 (%)

得点	0点	1点	2点	3点	4点	平均点
人数	8 (10.3)	32 (41.3)	17 (21.7)	15 (19.2)	6 (7.7)	1.7点

<分析と考察>

およそ 6 割の生徒が「英語が（どちらかといえば）好きとしながらも、「（どちらかといえば）苦手」という生徒が 7 割を超えており、苦手意識に対するアプローチが必要であると考えた。英検 3 級の読解問題については平均点が合格の目安となる 6 割の得点を超えているが、要点問題の平均正答率が 77.0%であるのに対して、概要問題の正答率は 59.0%であった。準 2 級（要点問題）については、平均正答率は 42.5%にとどまった。主体的な読解を促しながら、概要・要点を読み取るための指導を工夫する必要があるとあらためて認識した。

リサーチ・クエスチョン

英文を主体的に読んで、よりの確に概要や要点を読み取る力を身につけさせるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：英検 3 級の概要を問う問題の正答率が 60%以上になる。

英検 3 級，準 2 級それぞれの要点を問う問題の平均正答率が上がる。

改善のための手だて

- プレリーディング活動を工夫すれば、内容に対する興味・関心が高まり、より主体的に英文読解に取り組むようになるだろう。
 - ・ 画像や動画を用いて、オーラルイントロダクション／インタラクションを行う。
 - ・ 教科書の英文の内容に関連した身近な質問（絵の中に何が見えるか、写真の場所はどこだと思うかなど）を与え、ペアでのやり取りを行うことで、生徒のスキーマを活性化する。
- リーディングストラテジーを指導し、読解に活用させれば、自分の力で英文の概要や要点を的確に読み取れるようになるだろう。
 - ・ 主語＋動詞，修飾語句など，文構造に注意しながら読み進めるよう指導する。
 - ・ 指示語や代名詞が指す内容を把握しながら，話の筋を追うことを意識させる。
 - ・ 未知語の意味を文脈から推測しながら読むよう指導する。
 - ・ Scanning（情報検索読み）の読解活動を行う。
 - ・ 概要理解の活動として，教科書各パートのタイトル付けや，画像を利用したリテリングを行う。
- ポストリーディング活動として，聞いたり話したりする活動を行えば，読解の目的意識が高まり，より主体的に英語を読もうとする態度が身につくだろう。
 - ・ 読んだ内容について確認するリスニング活動を行う。
 - ・ 英文読解を通じて学んだ語彙や知識を活用して英語で話すペア活動を毎パート行う。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

- ・ 第 2 回 読解力テスト（1 月実施：受験者数 77 名）

第 1 回と同様に，英検 3 級，準 2 級の読解問題を使って，生徒の読解力を調べた。

英検 3 級 (1 点×5 問 : 問 1～4 要点問題, 問 5 概要問題)

※人数 (%)

得点	0 点	1 点	2 点	3 点	4 点	5 点	平均点
人数	0 (0.0)	0 (0.0)	6 (7.8)	19 (24.7)	31 (40.2)	21 (27.2)	3.9 点

	問 1	問 2	問 3	問 4	問 5
問題別正答率	100.0%	67.6%	80.5%	88.3%	50.6%

英検準 2 級 (1 点×4 問 : すべて要点問題)

※人数 (%)

得点	0 点	1 点	2 点	3 点	4 点	平均点
人数	15 (19.5)	26 (33.8)	20 (30.0)	13 (16.9)	3 (3.9)	1.5 点

・第 2 回 アンケート (1 月実施 : 回答者数 79 名)

1. 導入の活動によって, 英文内容への興味・関心や読解への意欲は上がったか。

上がった	どちらかといえば 上がった	どちらかといえば 上がらなかった	上がらなかった
15 人 (19.0%)	51 人 (64.6%)	12 人 (15.2%)	1 人 (1.3%)

2. 読解の際に, 主語・動詞や指示語等に気をつけて読むようになったか。

なった	どちらかといえば なった	どちらかといえば ならなかった	ならなかった
24 人 (30.4%)	40 人 (50.6%)	12 人 (15.2%)	3 人 (3.8%)

3. 読解の際に, 概要をとらえようとしながら読むようになったか。

なった	どちらかといえば なった	どちらかといえば ならなかった	ならなかった
26 人 (32.9%)	45 人 (57.0%)	8 人 (10.1%)	0 人 (0.0%)

4. 1 月に実施したテストについて, 7 月と比べて読み方や難しさに変化があったか。

(自由記述 : 一部抜粋)

- ・わからない単語でも予想して読む力がついたと思う。
- ・大事だと思うところをマークするようになった。
- ・主語+動詞を素早く認識できるようになり, 読むスピードや理解力が上がったと感じた。
- ・指示語などに注意しながら取り組めるようになった。
- ・問題文を理解しやすくなったと思った。
- ・以前より確信を持って解けた問題が増え, 正答率も上がって自信が高まった。
- ・3 級の問題がスムーズに解けるようになった。準 2 級は難しかったが, 概要を把握しようという意識が持てるようになった。

<分析と考察>

第 2 回の読解力テストでは, 3 級の平均点が第 1 回の 3.3 点から 3.9 点へと多少上がった。しかし準 2 級については平均点が下がり、設問の平均正答率にすると 37.5% (前回 42.5%) になってしまった。読解の礎となる語彙・文法知識の涵養を含めた指導を粘り強く続けたい。3 級の要点問題の平均正答率は, 84.1% (前回 77.0%) まで上がったが, 概要問題の正答率は前回を下回り, 改善の目安に達しなかった。教科書英文を使って概要を読み取る活動は, おのずと要点のものよりも数が少なくな

るため、練習機会が足りなかったことが原因かもしれない。教科書以外の短い英文での演習を行うなど、指導計画の見直しが必要であろう。一方、事後アンケート1, 2の結果から、「改善のための手だて」としたプレリーディング活動や、リーディングストラテジーの指導については、生徒の主体的に読む意欲の向上や、リーディングストラテジーを活用して英文を読もうとする姿勢に繋がったと考える。さらに、事後アンケート4では、8割以上の生徒が自分の変化について肯定的な振り返りをしており、読解スピードや問題文の理解度の向上、未知語の意味を推測する力の向上に言及するコメントが多かった。これらのことから、著しい点数の向上は見られなかったが、生徒自身は「読む力」の伸びを実感していると思われる。

教師の変化

- ・事前準備として、導入活動を考える時間や、発問を考える時間を多く取り、工夫するようになった。
- ・教科書英文の読解について、予習を前提とせずに授業のなかで初見の英文として読ませることで、生徒の読みのプロセスや課題が見えるようになった。

今後の課題（次の改善点など）

- ・読む英文の量が不足しているため、教科書以外の初見の英文を読む活動を定期的、継続的に行う必要がある。
- ・解説が必要な文構造、文法項目について、事前に慎重に吟味して絞り込み、計画的に指導するようになりたい。
- ・スピーキング活動については、英文内容によって実施に偏りがあったので、計画的かつ継続的に実施していく必要がある。
- ・これまで不足しているライティング活動についても、読解と関連させながら計画的に実施したい。

まとめ・感想

今回、生徒と目標を共有し、事前・事後のアンケート、読解力調査の比較などを行いながら、生徒の現状や課題、テスト結果を生徒へ示しながら授業を計画することの重要性に気づくことができた。目標の共有や生徒へのフィードバックを通じて、生徒自身が学習を振り返り、課題を意識することで、学習意欲が向上することを実感することができた。また、データによって自身の指導法にどの程度効果があるのかを客観的に分析することで、課題や今後の改善への視点を理解することができた。本研究では、リーディングをテーマとしたが、4技能のバランスの取れた授業に向けて、どのような授業を計画し、実践していけばよいのか、今後も必要なテーマについて実践と振り返りをくり返ししながら、授業改善を継続していきたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

萩原一郎・久保野りえ.(2020).「文法導入から練習へ」『英語教育』2020年6月号. 大修館書店.

能動的な読みと的確な内容理解を促すリーディング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は2クラス79名（男子41名、女子38名）の生徒である。授業においては、ほとんどの生徒がペアワークやグループワークなどに積極的に取り組んでいるが、英語に対して苦手意識を持っている生徒が多い。また、ほとんどの生徒が大学進学を希望している。

解決すべき課題

英文を読むことは、英語をただ日本語に訳すことだと考えている生徒が多く、日本語訳がないと不安になる生徒も少なくない。そのため、パラグラフごとの要点や、文章全体のメッセージをつかむという視点で英文を読むことに慣れていない。目的意識を持って英文を読み、概要や要点、筆者の意見を的確にとらえる力を身につけさせたい。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・第1回 英語学習に関するアンケート（6月実施：回答者数75）

1. 英語を読む力はこれからの生活のなかで必要だと思いますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
58人 (77.3%)	15人 (20.0%)	2人 (2.7%)	0人 (0.0%)

2. 初見の英文を読む時や、授業中の「速読の活動」の時に、筆者の主張や、大切だと思われる文を探しながら読むことを意識していますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
14人 (18.7%)	29人 (38.7%)	25人 (33.3%)	7人 (9.3%)

<分析と考察>

9割以上の生徒が英語を読む力は必要だと感じており、スピーキングなどの言語活動と並行して「読む力」を養う指導の必要性をあらためて感じた。一方で、筆者の主張や大切だと思われる文を探すことを意識せずに英文を読んでいる生徒が4割を超えており、生徒の英文を読む際の意識を変えることが必要だと感じた。また、自由記述欄の回答から、多くの生徒が未知語の推測のしかたと、英文を読む速度を上げる方法を知りたいと感じていることがわかった。

- ・第1回 読解力テスト（6月実施：受験者数79）

過去の英検準2級の長文読解問題を使って生徒の読解力を調べた。（問1～4は選択式の要点問題、問5は英文の概要を日本語1～2文でまとめる追加の自作問題）

要点問題（選択式）

0点	1点	2点	3～4点	平均点
2人(2.5%)	3人(3.8%)	6人(7.6%)	68人(86.1%)	3.2

概要まとめ問題（日本語1～2文）

0点	1点	2点	平均点
20人(25.3%)	44人(55.7%)	15人(19.0%)	0.9

<分析と考察>

選択式の要点問題では、この時点で85%以上の生徒が7割(3問)以上正解していたが、英文の概要をまとめる問題では2点満点を取った生徒が20%を下回り、多くの生徒が苦戦していた。選択問題では4点満点を取ったにもかかわらず、概要問題では0点だった生徒もいたため、選択肢から正しい答えを選ぶことはできても、必ずしも英文の概要や筆者のメッセージを理解できているわけではないことがわかった。

リサーチ・クエスチョン

能動的に初見の英文を読み、概要や要点、筆者の主張を的確に読み取ることができる能力を身につけさせるにはどのような指導をすればよいか。

- 改善の目安：
- ・英検準2級レベルの長文読解問題（選択式：1点×4問）に7割以上正解する生徒が全体の9割以上になる。
 - ・英検準2級レベルの長文の概要をまとめる問題（日本語記述式：2点満点）で、1点以上を取る生徒が全体の8割以上になる。

改善のための手だて

- 導入のしかたを工夫すれば、トピックに対する生徒の関心が高まり、自ら進んで英文の内容を読み取ろうとする意欲が高まるだろう。
 - ・トピックに関連するアンケートを行い、その結果を共有するなどしてトピックに対する興味を持たせる。
 - ・実際に読む前に、英文全体および各パートにかかわる問いを提示し、目的を意識した読解を促す。
- リーディングストラテジーを指導し、それを活用するタスクにくり返し取り組ませれば、自分の力で概要や要点、筆者の主張を的確に読み取れるようになるだろう。
 - ・語彙を確認する前に、文の前後関係から未知語の推測をさせるペア活動を行う。
 - ・トピックセンテンスやディスコースマーカを探しながら読むよう意識させる。
- リーディングタスクを工夫すれば、概要や要点、筆者の主張を再確認し、より内容中心に英文をとらえる姿勢が身につくだろう。
 - ・生徒自身にグラフィックオーガナイザーを描かせることで、本文のキーワードを図式化し、重要な情報を整理させる。
 - ・本文読解のあとにパートごとの概要を日本語で簡潔にまとめる活動を継続して行い、筆者は何を伝えたいのか考えながら英文を読む習慣をつけさせる。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・第2回 英語学習に関するアンケート（12月実施：回答者数 75）

1. 初見の英文を読む時や、授業中の「速読の活動」の時に、筆者の主張や、大切だと思われる文を探しながら読むことを意識していますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
17人 (22.7%)	52人 (69.3%)	6人 (8.0%)	0人 (0.0%)

2. 1学期またはそれ以前に比べて、自信を持って初見の英文を読めるようになりましたか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
27人 (36.0%)	44人 (58.7%)	3人 (4.0%)	1人 (1.3%)

<分析と考察>

第2回のアンケートでは、筆者の主張や大切だと思われる文を探すことを意識して英文を読んでいる生徒が9割を超えており、英文を読む際の生徒の意識が変わったことは大きな成果だといえる。この質問項目については、第1回・2回のデータがそろっている75人について検定（Wilcoxonの符号付順位検定）を行ったところ、有意な向上が認められた（ $p=0.00<0.05$ ）。また、レッスンごとに目標を設定し、段階的にリーディングストラテジーの指導を行ったことで、9割以上の生徒が以前より自信を持って初見の英文を読むことができるようになったものと考えられる。

・第2回 読解力テスト（12月実施：受験者数 79）

過去の英検準2級の長文読解問題を使って再度生徒の読解力を調べた。（問1～4は選択式の要点問題、問5は英文の概要を日本語1～2文でまとめる自作の追加問題）

要点問題（選択式）

0点	1点	2点	3～4点	平均点
0人 (0.0%)	2人 (2.5%)	3人 (3.8%)	74人 (93.7%)	3.6

概要まとめ問題（日本語1～2文）

0点	1点	2点	平均点
16人 (20.3%)	36人 (45.6%)	27人 (34.2%)	1.1

<分析と考察>

選択式の要点問題に7割以上正解した生徒の割合が93%に増加し、改善の目安に到達した。また、個々の生徒の伸びについてt検定（対応のあるデータ）を行ったところ、有意差が認められた（ $p=0.00<0.05$ ）。一方で、概要まとめ問題においては、1点以上を取った生徒は全体の79.8%と、「1点以上を取る生徒が全体の8割以上になる」という目標にはわずかに届かなかったが、第1回の読解力テストに比べて2点満点を取った生徒は15%増加した。t検定（対応のあるデータ）を行ったところ、概要まとめ問題においても有意な向上が認められた（ $p=0.04<0.05$ ）。概要まとめ問題において2点を取った生徒は、英文の概要を正確にとらえるとともに、文章全体の構造や論理の流れを理解し、メインアイデアを支持する文を見つけることができたのだと考えられる。さらに、英語を苦手とする生徒にも改善が見られた。第1回の読解力テストでは、概要問題の解答を白紙で出した生徒が7人い

たが、今回は全員が自分のことばで概要をまとめることができた。筆者のメッセージを読み取ろうとする意識で英文を読み、日本語で概要をまとめる演習に授業のなかでくり返し取り組んだことがこの結果につながったと考えられる。

教師の変化

英文の論理構造や筆者の主張を生徒に正確に説明するために、教科書の英文をより詳しく分析するようになった。ルーブリックを作成して生徒の書いた本文の概要を評価することで、英文のどの部分で生徒がつかずしているのかを把握し、授業でフィードバックするようになった。また、生徒のニーズに合わせた目標を立て、その日の授業のゴールや、読解力向上に向けた長期的な目標、活動のねらいなどを生徒と共有することで一体感が生まれ、生徒とともに授業づくりをしていると感じるようになった。

今後の課題（次の改善点など）

未知語の推測を的確に行うには、基礎的な語彙力を強化する必要があるため、既習語彙についても、表現活動での使用などを通して、より着実に身につけさせる必要がある。また、英文のメインアイデアの理解が不十分だった生徒も多く見られたため、正確な概要理解のための指導を引き続き工夫していきたい。説明文や意見文、物語文など、さまざまなテキストタイプの英文に取り組ませるなかで概要をまとめる演習を継続して行い、生徒の読解力をさらに向上させたい。

まとめ・感想

これまでは、各レッスンの最終目標として主にプレゼンテーションなどの表現活動を設定し、それに向けた指導を中心に行ってきたが、今回の研究を通して、リーディング指導の奥深さをあらためて感じた。読解の活動においては、生徒がじっくりと英文を読み、筆者のメッセージを理解することに重点を置いたため、ペアやグループでの活動に加えて、個々で黙々と本文を読む時間も増えた。そのため、表面的には生徒の主体的な活動が少し減ったように思えたが、机間指導をすると、生徒が本文の概要をつかむという目的意識を明確に持って以前よりも集中して英文を読み、課題に取り組んでいることが伝わってきた。長文読解の指導においても、主体的、能動的なリーディング活動、いわば「アクティブ・リーディング」の活動をデザインし、実施できたことは大きな成果であった。今後も生徒のニーズに合った指導を計画的に行い、生徒と目標を共有しながらよりよい授業づくりを続けていきたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

卯城祐司.(2009).『英語リーディングの科学：「読めたつもり」の謎を解く』 研究社.

パッセージの概要・パラグラフの要点を意識させる読解指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は2クラス78名（男子42名，女子36名）の生徒である。ほぼ全員が大学進学を目指している。1つのクラスは明るく協力的な雰囲気があり，もう1つのクラスは，生徒がそれぞれ真面目に取り組んでいる印象である。

解決すべき課題

単語・文法・リスニングなど，1年生の頃から継続して取り組んでいるものについては力がついてきているようだが，長文読解については，英文を日本語に置き換えて内容を考えるとといった，表面上の理解に留まり，英文の概要を的確に把握できていない生徒が多い。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

- ・第1回読解力テスト（7月実施：受験者数77）

分析対象は第1回，2回の両方を受験した生徒72人とした。英検2級過去問題 大問3-Cの2回分（計10問：1問1点）を使って，生徒の読解力を調べた。

人数	平均点	標準偏差	最大値	最小値
72	5.2	2.33	10	0

0～1点	2～4点	5点	6点以上
2人（2.8%）	28人（38.9%）	12人（16.7%）	30人（41.7%）

<分析と考察>

全問正解の生徒がいる一方で，全問不正解の生徒もあり，読解力の差に幅がみられた。与えられた課題以外でも長文を読む機会を作っている生徒と，そうでない生徒に差が出たのではないかと考える。平均点が予想していたより低く，全体的に英文の内容を正確に読み取れるような読み方の工夫についての指導が必要であることがわかった。

・英語に関するアンケート（6月実施：回答者数 77）＊自由記述中の言及：上位 3つ

1. 英語を読むうえで苦勞していることは何ですか。

1. 語彙知識の不足	2. 文法知識の不足	3. 戻って読み直す習慣
61人 (79.2%)	8人 (10.4%)	6人 (7.8%)

2. 英語を読めるようになるために、どのようなことを授業で学べるとよいですか。

1. 長文読解のコツ	2. 文法知識	3. 語彙知識
13人 (16.9%)	12人 (15.6%)	10人 (13.0%)

<分析と考察>

長文を読むうえでの基礎となる、語彙力と文法力を伸ばしたいと考えている生徒が多いことがわかった。しかしそれ以上に、「長文の読み方のコツ」を教えてほしいと答えた生徒が多かった。英文を読むうえで苦勞していることとして、「何度も戻ってしまう」との回答が複数あったことも注目に値する。英文をどう読んでよいかわからず、何度も読み返さなければならない生徒の存在を示している。語彙・文法の力を伸ばしつつ、どのような点を意識すれば英文を正確に読めるようになるのかといった読解指導を、授業でより丁寧に行う必要がある。

リサーチ・クエスチョン

まとまった初見の英文を主体的に読み、概要や要点・論理展開を的確に把握することができるようにするには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：第2回読解力テストで、6点以上の生徒が全体の6割以上、4点以下の生徒が全体の3割以下になる。

改善のための手だて

- 初見の英文を読む機会を定期的に与えれば、英文読解に対する自信や達成感が高まるだろう。
 - ・週に1回程度、自宅学習で長文読解問題集に取り組みさせる。
 - ・長期休業中に洋書を読む機会を与える。

- パラグラフの要点を把握しながら、パラグラフ間の関連性を読み取る指導をすれば、英文全体の論理展開を的確に理解できるようになるだろう。
 - ・パラグラフごとのメイン・アイディアを問う質問をする。
 - ・パラグラフごとにキーワードを抜き出し、それを用いてパラグラフの構成を図示する。
 - ・パラグラフ内の複雑な説明や概念は絵や写真を用いて説明する。

- 英文全体の概要理解を促すリーディングタスクを工夫すれば、注意深く読むようになり、よりの確に内容を理解することができるようになるだろう。
 - ・読む前に英文のテーマに関する質問を投げかけたり、背景知識を得られるようなやり取りをさせ

たりするなど、プレリーディング活動を工夫する。

- ・教科書の内容読解の際、明示的質問 (display questions) だけでなく、本文から類推可能な内容を考えさせる推論質問 (inferential questions) など、さまざまな形式の Q&A に取り組ませる。

生徒の変化 (途中経過, 事後の検証結果など)

- ・第2回読解力テスト (12月実施: 受験者数 73)

分析対象は第1回, 2回の両方を受験した生徒 72 人とした。英検 2 級過去問題 大問 3-C の 2 回分 (計 10 問: 1 問 1 点) を使って, 再度生徒の読解力を調べた。

人数	平均点	標準偏差	最大値	最小値
72	7.2	2.18	10	2

0~1 点	2~4 点	5 点	6 点以上
0 人 (0.0%)	10 人 (13.9%)	8 人 (11.1%)	54 人 (75.0%)

<分析と考察>

第1回より平均点が 2 点上がった。この 2 つの平均値の差が統計的に意味のある差かどうかを調べるため, 事前・事後のデータを検定 (対応のあるデータの t 検定) にかけてところ, 有意な向上が認められた ($p=0.00<0.05$)。また, 6 点以上だった生徒が全体の 75% を占め, 4 点以下だった生徒が全体の 13.9% となり, 改善の目安を達成することができた。

- ・英語に関するアンケート (12月実施: 回答者数 68)

1. この授業を通して, 英語のどのような知識や力が伸びたと思いますか。(1~3 個選択)

聞く力	話す力	読む力	書く力	語彙知識	文法知識
23 人 (33.8%)	14 人 (20.6%)	43 人 (63.2%)	15 人 (22.1%)	35 人 (51.5%)	34 人 (50.0%)

2. それぞれの学習活動は, 初見の長文を読むうえで, または本文を注意深く読み内容を理解するのに役立ったと思いますか。

	役に立った	まあまあ役に立った	あまり役に立たなかった	役に立たなかった
長文読解問題集	13 人 (19.1%)	42 人 (61.8%)	13 人 (19.1%)	0 人 (0.0%)
長期休業中の洋書 ※	11 人 (16.2%)	26 人 (38.2%)	29 人 (42.6%)	0 人 (0.0%)
さまざまな形式の質問	28 人 (41.2%)	33 人 (48.5%)	7 人 (10.3%)	0 人 (0.0%)
導入時の概要質問	19 人 (27.9%)	38 人 (55.9%)	11 人 (16.2%)	0 人 (0.0%)
読む前の背景知識	26 人 (38.2%)	36 人 (52.9%)	6 人 (8.8%)	0 人 (0.0%)

※「課題に取り組んでいない」2 人 (2.9%)

<分析と考察>

この授業を通して、英語を読む力が向上したと考える生徒が多く、語彙知識、文法知識が向上したと答えた生徒の数がそれに次いだ。生徒の抱える課題を意識して継続的に行った、改善のための手だてが効果を上げたと判断できる。定期的に長文演習を行ったことや、パラグラフごとの Q&A をはじめ、さまざまな形式の Q&A を工夫したことは、読解のうえで役に立ったと大多数の生徒は考えているようだった。長期休業中の洋書（課題）については、授業で解説する機会を持たなかったためか、読解力の向上につながったと回答する生徒が比較的少なかった。今後の課題の与え方について再考の必要があることを示しているといえるだろう。長文読解で扱う題材は、幅広い教養を必要とするものが多いため、授業において教師が本文導入時に質問をしたり、背景知識を与えたりしたことも、初見の英文や教科書本文の理解に役立ったと生徒が感じることに繋がったと考えられる。

教師の変化

- ・長文を授業で扱う際、パラグラフの構成を意識して教材研究を行い、解説をするときにどのように黒板に図示すれば生徒に伝わりやすいかについて、板書計画をより綿密に考えるようになった。
- ・教科書の概要理解をするための Q&A を作成する際、一般常識や他教科の知識など、生徒のスキーマを活性化させることを念頭に作成するようになった。

今後の課題（次の改善点など）

長文読解の際、教師の支援があれば、パラグラフの構成を意識して全体の概要を捉えられるようになってきたが、自力で読む力はまだまだ十分とは言えない。生徒が自力で読めるように、さらなる指導の工夫が必要であるとともに、主体的に英語を読む習慣をつけさせるような働きかけも、今後の課題であると考えている。

まとめ・感想

自分の授業の一つひとつのタスクについて、どのような目的・効果があって行うのかということをつくり考えるようになり、それらが徐々に明確になってきたと思う。この研修を通じて、生徒に身につけさせたい力を向上させるためにどのような手だてが効果的であるかを考え、検証し、一連の取組を文章にすることで、指導計画のしかたを可視化することができた。

自立した読み手を育てるリーディング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は3クラス120名（男子53名，女子67名）の生徒である。ほとんどの生徒が4年制大学への進学を希望し，難関大学を目指している生徒も多い。英語学習への意欲は高く，将来，留学を希望していたり，外国で働きたいと考えていたりする生徒もいる。授業の活動には意欲的に取り組んでいる。

解決すべき課題

社会的な事柄も含め，さまざまなトピックの英文読解に自信をもって取り組み，的確に概要や要点を読み取る力を身につけさせたいのだが，語彙力や英文を前からそのまま読む力が不足している生徒が多い。また，多くの生徒が英文を読むことに自信がない。また，リーディングストラテジーを指導できておらず，「どのように読めばよいか」という，自分の力で読めるようになるための指導が不足している。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

- ・第1回 英語の授業にかかわるアンケート（5月実施：回答者数 93）

1. あなたは自分自身の「英語を読む力」についてどう思いますか。

十分にある	どちらかといえばある	どちらかといえばない	まったくない
2人 (2.2%)	32人 (34.4%)	48人 (51.6%)	11人 (11.8%)

2. 英語を読む力はこれからの生活のなかで必要だと思いますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
82人 (88.2%)	9人 (9.7%)	1人 (1.1%)	1人 (1.1%)

3. 実際の学校での英語の授業を通して，自分自身の「英語を読む力」は身につけている（あるいは伸びている）と思いますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
27人 (29.0%)	55人 (59.1%)	10人 (10.8%)	1人 (1.1%)

4. 英語の勉強について，困っていることやわからないことがあれば書いてください。

- ・修飾語句や，接続詞が多く使われている文の読解が難しい。前から順に訳していても結局全体がわからないと読み解けない。
- ・個々の文について，文の要素（SVなど）や文型を確認しながら読み進めているが，かなり時間がかかってしまう。

<分析と考察>

英語を読む力がこれからの時代に必要だと感じている生徒が 88.2%いるのに対して、自身の「英語を読む力」が「(どちらかといえば) ある」と考えている生徒が 36.6%にとどまることから、多くの生徒が、読解力の必要性を感じながらも、自信を持てずにいるということがわかった。また、自由記述の回答から、細かい部分にこだわって読み進めるあまり、全体の意味が把握できなかつたり、時間がかかり過ぎてしまったりする生徒もいることがわかった。

・第1回 英文読解テスト（7月実施：回答者数 111）

初見の英文で、パラグラフの要点やパッセージの概要を読み取る力がどれくらい身についているかを調べるために、英検2級過去問題の大問3のCを出題した。

実施月	N	正答数ごとの人数 (%)					
		0問	1問	2問	3問	4問	5問
7月	111	3人 (2.7%)	14人 (12.6%)	28人 (25.2%)	29人 (26.1%)	22人 (19.8%)	15人 (13.5%)

<分析と考察>

英検2級の合格正答率は各技能6割程度とされており（日本英語検定協会）、ここでは5問中3問以上の正答にあたるが、5問中3問以上正答できた生徒は、全体の59.4%であった。生徒の様子を見ると、素早く必要な情報を探したり、パラグラフの要点やパッセージの概要を読み取ったりする力が不足しているように感じた。

リサーチ・クエスチョン

さまざまなトピックの英文読解に自信をもって取り組み、的確に概要・要点を読み取る力を身につけさせるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：英検大問3のCで5問中3問以上正答する生徒が全体の7割以上になる。

改善のための手だて

- Pre-reading 活動として単元の内容に関連したスキーマを与えれば、書かれている内容が身近なものに感じられるようになり、自信をもって教科書の内容を読むことができるようになるだろう。
 - ・ Pre-reading 活動として、単語リストの提示、背景知識の理解につながる動画の提示、概要をつかませる Listening 活動を行う。
- さまざまなリーディングタスクを与えれば、英文をより深く、主体的に読解することができるようになるだろう。
 - ・ 要点に関する発問を複数個提示し、即座に答えさせる。
 - ・ 推論発問を提示し、筆者の意図や概要を把握させる。
 - ・ サマリーを書かせる活動を通して、各パラグラフのトピックセンテンスやパッセージの概要を把握させる。

- リーディングストラテジーを指導し、練習させれば、自分の力で初見の英文を読み進めることができるようになるだろう。
 - ・ディスコースマーカーに着目する読み方を指導する。
 - ・発問の提示によって、パラグラフの要点を確認しながら読むことを習慣づける。
- Post-reading 活動として、初見の英文読解に取り組ませれば、自身の読解力の確認ができ、自信を高めることができるだろう。
 - ・教科書の内容と関連したトピックの発展的な英文を扱う。
 - ・指導したリーディングストラテジーを活用できるリーディングタスクを与える。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・第2回 英語の授業にかかわるアンケート（12月実施：回答者数 107）

1. あなたは自分自身の「英語を読む力」についてどう思いますか。*回答なし：2人（1.9%）

十分にある	どちらかといえばある	どちらかといえばない	まったくない
1人（1.0%）	34人（31.8%）	55人（51.4%）	15人（14.0%）

2. 英語を読む力はこれからの生活のなかで必要だと思いますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
89人（83.2%）	16人（15.0%）	1人（0.9%）	1人（0.9%）

3. 実際の学校での英語の授業を通して、自分自身の「英語を読む力」は身につけている（あるいは伸びている）と思いますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
27人（25.2%）	56人（52.3%）	21人（19.6%）	3人（2.8%）

<分析と考察>

本調査の結果は、第1回とほとんど変わらなかった。変化がなかった要因として、授業内で取り組ませる英文の難易度が高かったため、自身の成長を感じづらかったことが考えられる。

・第2回 英文読解テスト（12月実施：回答者数 111）

第1回英文読解テスト同様に、英検2級過去問題の大問3のCを出題した。

実施月	N	正答数ごとの人数 (%)					
		0問	1問	2問	3問	4問	5問
7月	111	3人 (2.5%)	14人 (12.6%)	28人 (25.2%)	29人 (26.1%)	22人 (19.8%)	15人 (13.5%)
12月	111	2人 (1.8%)	8人 (7.2%)	27人 (24.3%)	20人 (18.0%)	35人 (31.5%)	19人 (17.1%)

<分析と考察>

5問中3問以上に正答できた生徒は59.4%から66.7%まで増加し、読む力は伸びたといえる。事前・

事後のデータを検定（対応のあるデータの t 検定）にかけたところ、有意な向上も認められた ($p = 0.02 < 0.05$)。しかし、改善の目標とした7割にはおよばなかった。その原因として、手だてとした指導・活動を実施する機会が十分でなかったこと、語彙力が不足している生徒が多かったことなどが考えられる。

教師の変化

- ・生徒の意識やスキルなどの調査に基づき、目標を共有しながら、生徒とともに進めていく授業改善の必要性を強く感じた。
- ・効果的な読解指導のためには、教師自身の「読み」のメタ認知や教材の精緻な読みが必須だと学んだ。
- ・単元の最初、授業の最初、各活動の最初に、目的や意義を明示するようになった。
- ・英語教育に関する文献を読んだり、研修に参加したりすることで、教師自身の引き出しを増やし続けることが、授業改善には必須だと感じた。

今後の課題（次の改善点など）

今回、課題として残った、語彙力の定着に有効な指導法の研究や、なかなか取り組ませることができなかった「未知語の推測」についての指導法の研究をしていきたい。また、授業ではアウトプットを多く取り入れているが、アウトプットによる言語習得（アウトプット仮説）に関する研究もしていきたい。さらに、まだまだ足りないと感じた、同僚間での指導や活動の目的のすり合わせも積極的に行いたい。

まとめ・感想

アドヴァンスト研修に参加できたことは、大きな意味のある経験になった。ただ教科書に沿って単元ごとに授業展開を考えるのではなく、生徒の現状をつぶさに調べてゴールを設定し、毎回の授業や活動、発問を精査することで、授業の質を向上させることができたと感じた。

研修を通して、さまざまな教授法や英語教師として必要な考え方を学ぶことができた。また、他校の先生方の取組を知ることができたこと、今まで以上に英語教育関連の文献を読んだことが、自身の授業改善に大きな影響を与えた。「自分なりのやり方」を根拠なく続けるのではなく、根拠や根幹となる考え方をもって、授業を見直し、ブラッシュアップすることができた。今後は、これを自身の経験にとどめるのではなく、同僚や、他校の先生方にも還元し、英語教育の質的向上に貢献したいと強く思っている。

授業改善にあたって参考にした資料等

江原美明，岡田圭子，嶋林昭治，ブレンダ・ハヤシ(著). (2015). 『基礎から学ぶ英語科教育法』松柏社.
紺渡弘幸，島田勝正，田中武夫(著). (2015). 『推論発問を取り入れた英語リーディング指導—深い読みを促す英語授業』三省堂.

日本英語検定協会. 「英検 CSE スコアでの合否判定方法について」

https://www.eiken.or.jp/eiken/exam/eiken-cse_admission.html

論理的で一貫性のある文を書く力を育てる指導

科目名	コミュニケーション英語 I	学年	1	形態	HR・習熟度・小集団
-----	---------------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は3クラス 120名（男子 59名，女子 61名）の生徒である。例年と同じく，多くの生徒が4年制大学への進学を希望しており，学習意欲は非常に高い。3クラスとも明るく，仲がよい。また授業だけでなく，学校行事や部活動にも積極的に取り組んでいる生徒が多い。

解決すべき課題

自分の考えについてまとまりのある英文を書かせると，読み手に伝わる英文を書くことはできるが，多くのものが型通りで独自性に欠けている。その結果として説得力が十分でないものも散見される。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

- ・アンケート結果（7月実施：回答者数 112名）

Q1 この授業でどのような知識や力を伸ばしたいと思いますか？1～3個選んでください。

項目	人数 (%)	項目	人数 (%)
英語を聞く力	66 (58.9%)	英語を話す力	88 (78.6%)
英語を読む力	52 (46.4%)	英語を書く力	45 (40.2%)

Q2 あなたが英語を書くときにまずくポイントはなんですか，1～2個選んでください。

項目	人数 (%)	項目	人数 (%)
単語がわからない	70 (62.5%)	文法がわからない	63 (56.3%)
書くことを思いつかない	34 (30.4%)	問題の意味を読み取れない	13 (11.6%)

<分析と考察>

「話す力」を伸ばしたいという生徒が最も多くいる一方で，「書く力」に対する意識はあまり高くないことがわかった。ライティングについて，多くの生徒が語彙・文法に困難を感じていたが，これは知っている言語知識をうまく使って書くことに慣れていないことが原因であると推察された。また，3割以上の生徒が「書くことを思いつかない」としており，考えを整理して，自分の英語で表現する日常的な練習が必要であると考えた。

- ・第1回ライティングテスト（7月実施：受験者数 117名）

トピック：日本のいくつかの会社では，職場でのコミュニケーションをすべて英語で行う取組をしています。この取組に賛成か反対か，いずれかの立場であなたの考えを書きましょう。

評価用ルーブリック：

	文法(Grammar)	内容(Content)	構成(Composition)
◎	<○に加えて> Local Error がなく、読者が問題なく理解できる英文を書いている。	<○に加えて> 着眼点や発想力が素晴らしく、その人にしか書けない独自性を含めた英文を書いている。	<○に加えて> 理由や例の支持文が2つ以上含まれている。
○	Global Error を含まず、読者が要点を理解できる英文を書いている。	問いに対する考えや理由が読者に明確に伝わり、一貫性のある英文を書いている。	意見（主題文）、理由や例（支持文）、結論（まとめ文）の構成が確立しており、まとまりのある英文が書けている。
△	Global Error を含むが、読者が推測することで理解できる英文を書いている。	問いに対する考えまたは理由が読者に明確に伝わる英文を書いている。	意見（主題文）と理由や例（支持文）が含まれている英文を書いている。
※	Global Error を含んでおり、読者が推測をしても理解できない英文を書いている。	問いに対する考えや理由が読者に伝わらない英文を書いている。	意見（主題文）または理由や例（支持文）が含まれている英文を書いている。

Error の定義：

Global Errors	Local Errors
<ul style="list-style-type: none"> ・「主語＋動詞」構造の欠如 ・意味不明の文・時制の誤り ・接続詞の誤用 ・その他、コミュニケーションに支障をきたす著しい文法的誤り 	<ul style="list-style-type: none"> ・活用形・スペリングの誤り ・「主語＋動詞」の呼応の誤り ・前置詞の欠如と誤用・語彙選択 ・コロケーションの誤り ・句読法等の誤り ・その他、コミュニケーションに支障をきたさない軽微な文法的誤り

結果： *人数 (%)

	文法(Grammar)	内容(Content)	構成(Composition)
◎	0 (0.0%)	7 (6.0%)	72 (61.5%)
○	33 (28.2%)	66 (56.4%)	30 (25.6%)
△	84 (71.8%)	44 (37.6%)	15 (12.8%)
※	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)

<分析と考察>

「構成」の評価結果から、ほとんどの生徒がパラグラフの形式は理解しているようだということがわかった。一方「内容」については、4 割近い生徒の作文に一貫性を欠く文が見られ、自分の考えをまとめ切れていない生徒が少なからずいることが推察された。「文法」については、特に論理性をつかさどる接続詞の誤用が目立っており、指導の必要性を感じた。

リサーチ・クエスチョン

身近な話題について、論理的で一貫性のある意見文を書く力を身につけさせるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：ライティングテストのルーブリック評価において、各観点で○以上になる生徒の割合が、それぞれ全体の7割以上になる。

改善のための手だて

- 身近な話題について，自分の考えを表現するような活動を継続すれば，自分の意見を短時間でまとめることができるようになるだろう。
 - ・ 1 分間のスモールトーク
 - ・ 意見文の読み合いと peer feedback
 - ・ 即興ディベート（マッピングによるプランニング，意見の共有，ALT からのフィードバック）
 - ・ ポストリーディング活動としてのスピーチ（ルーブリックで評価）
- 文の接続構造や論理的なつながりについて明示的に指導すれば，より適切にまとまりのある意見文を書けるようになるだろう。
 - ・ 「理由」「譲歩」「条件」等を表す接続詞の指導
 - ・ その他，ディスコースマーカ―となる副詞，副詞句の指導

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

- ・ 第 2 回ライティングテスト（1 2 月実施：受験者数 117 名）

トピック：スマートフォンが普及した現代の社会において，学校の授業におけるスマートフォンの利用に関する話題が多くあります。授業におけるスマートフォンの利用に賛成か反対か，いずれかの立場を選んで，あなたの考えを書きましょう。

結果： *人数 (%)

	文法(Grammar)	内容(Contents)	構成(Composition)
◎	10 (8.5%)	22 (18.8%)	110 (94.0%)
○	56 (47.9%)	70 (59.8%)	7 (6.0%)
△	51 (43.6%)	25 (21.4%)	0 (0.0%)
※	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)

<分析と考察>

すべての項目で△の割合が減り，全体的に改善が見られた。2 回の評価データを検定（Wilcoxon の符号付順位検定）にかけたところ，各項目で有意な向上が認められた（すべて $p = 0.00 < 0.05$ ）。「構成」についてはさらにはかなりの進歩が見られ，9 割以上の生徒が 2 つ以上の理由・例を入れた，より論理性の高いパラグラフを書いていた。毎回の表現活動で構成を意識するように指導してきたことが結果につながったと考える。また，「内容」については目標であった 7 割の生徒が○以上に改善された。テーマに対する主観的な見方が客観的な見方へ変わる傾向が多く見られ，自己表現活動を継続してきたことが効果的であったと思われる。一方で「文法」については，改善は見られたが，目標の達成には至らなかった。原因の 1 つとして，書きたいことが増えてきて内容面へより多くの注意が向いたことで，正確さが多少おろそかになってしまったのではないかと推察される。また，接続詞・ディスコースマーカ―の練習や local error に対するフィードバックが不足していたことも影響したのではないと思われる。

・アンケート結果（12月実施；回答者数111名）

Q この授業でどのような知識や力が伸びたと思いますか？1~3個選んでください。

項目	人数 (%)	項目	人数 (%)
英語を聞く力	42 (37.8%)	英語を話す力	54 (48.6%)
英語を読む力	48 (43.2%)	英語を書く力	68 (61.3%)

<分析と考察>

「英語を書く力」の向上を感じた生徒の割合が最も多く、「話す力」がそれに続いた。改善の手だてとして行ったさまざまな活動について、それぞれの目的や目標が理解され、生徒の達成感につながったと考えられる。

教師の変化

これまで、1つのテーマを軸に年間の授業に取り組む経験がなかったため、毎回の授業で、活動の目的を明確に持ち、生徒と共有することの大切さに気づくことができた。また、生徒のつまずき、課題を的確に把握することで、適切な教科指導につなげることができるということがわかり、以前より、生徒の反応や活動の様子に気を配るようになったと思う。

今後の課題（次の改善点など）

「内容」の改善は見られたが、与えられたテーマに対する着眼点はよくても、その考えを支える理由づけや例示が単純になり、独自性に欠ける英作文が多かった。今後は、ただ意見を表現するだけでなく、反対の立場の意見を反証するなど、さらに主張を深める活動を取り入れる等の工夫が必要であると考えられる。また、課題が残った「文法」の正確さについては、多くの生徒に共通する誤りを全体で共有したり、一般的に誤用が多い表現・文法項目をリスト化して指導したりすることが必要であると考えられる。生徒同士のフィードバックでも、注意すべきポイントを提示するなど、生徒の気づきを増やす工夫を取り入れていきたい。

まとめ・感想

このアドヴァンスト研修を受講し、アクション・リサーチによる授業改善に取り組めたことは、とても貴重な経験だった。それまでは定番の活動によって授業をこなしていたような気がするが、一つひとつの活動に目的を持って取り組めたことで、一体感のある授業のなかで生徒の伸びを実感することができた。自分自身の授業を客観的に振り返り、筋道を立てた改善を試みたことは、英語教師としての一つの財産になったと思う。

授業改善にあたって参考にした資料等

望月昭彦(編著). (2001). 『新学習指導要領にもとづく英語科教育法 第3版』大修館書店.

高島英幸(編著). (2020). 『タスク・プロジェクト型の英語授業』大修館書店.

令和2年度 英語教育アドヴァンスト研修 担当講師 (50音順)

江原 美明 (えはら よしあき)

グエン, トアー (NGUYEN, Thoa)

高取 純子 (たかとり じゅんこ)

パリセ, ピーター (PARISE, Peter)

村越 亮治 (むらこし りょうじ)

令和2年度 英語教育アドヴァンスト研修

授業改善プロジェクト 報告書

ーアクション・リサーチによる高等学校英語授業での実践研究ー

発行日 令和3年3月31日

編集 神奈川県立国際言語文化アカデミア

(担当) 村越 亮治 江原 美明

発行 神奈川県立国際言語文化アカデミア

横浜市栄区小菅ヶ谷1丁目2-1

TEL 045(896)1091
